

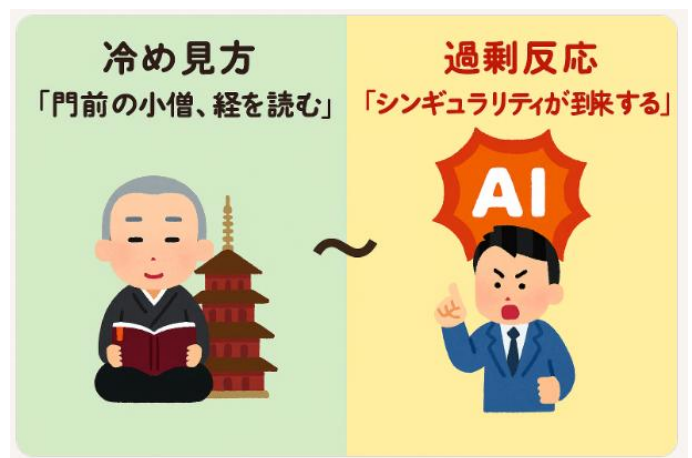
今さら聞けない AI(15(終)) この先、どうなっていく？

これまで14回に渡って、進展著しいAIの身近な実用例とリスクを論じてきました。

実用例としては、手書き文字の認識、分からない花や鳥の名前の問合せ、文字や音声での質疑、理系の専門的な計算、コールセンターでの一次対応、加えて、まだ開発途上であるものの研究におけるアイデア出し、顔の認識、自律ロボットの頭脳などを紹介してきました。

一方、リスクとしては、「人間がAIに似てきたらどうしよう」というAI依存症、AIの普及に伴う電力消費の急増問題、インターネットの劣化によるデータの大規模消失問題、そして、人間の制御を必要としない自律型AI兵器の恐怖について考察してきました。

新しい技術には功罪が同居し、もろ刃の剣となることは避けられませんが、それでは、この先、どうなっていくのでしょうか？ 専門家の見立ても2つに分かれています。24時間学習し、AIどうしで切磋する中で、早晚、人間の知能を越える「シンギュラリティ」が来るという先走りの見方、極論もあります。一方では、日々進化するとは言え、意味を理解している訳ではなく、所詮、「門前の小僧、経を読む」程度で、バカとAIは使いようといった冷めた見立てもあります。



いずれにしても、身体を持たず、まして、死ぬこともないAIが、知能は抜群としても、人間の本質に迫ることは難しいと思われ、大切なことは、AIの利用はあくまで、人間の補助に留める、人間の管理下に置くことが大原則になっていくと思われます。このことを無視してしまうと、野に虎を放つことになりかねません。

(竹の台 西元)